

FLYING

高知工科大学ニュースレター

FISH

2017
WINTER

フライングフィッシュ

69



高知工科大学
KOCHI UNIVERSITY OF TECHNOLOGY

ニッポン発のオリジナル技術

自己充填 コンクリート

OUCHI MASAHIRO

Self-Compacting Concrete is Japan's original technology that can be filled into the formwork by its own weight.



20th Anniversary
志の旗をより高く

マイクロバブルが粒子同士の摩擦を低減 「気泡潤滑型自己充填コンクリート」

FLYING FISH INTERVIEW

既成概念を覆した 「自己充填コンクリート」とは？

道路や橋、堤防といったインフラ整備に欠かせないコンクリートは、日本で最も使用されている建設材料だ。その品質は社会インフラの信頼性、ひいては私たちの暮らしの安全と豊かさも左右する。大内先生は、構造物の信頼性のさらなる向上をめざし、材料面から研究を行ってきたコンクリートの専門家。そんな先生が学生時代から一貫して研究を続けている四半世紀来のテーマが「自己充填コンクリート」だ。

コンクリートは、鉄筋を有する型枠内に確実に締め固められることで設計通りの性能を発揮する。しかし、締め固め作業には熟練の技術が必要で、不十分な場合は、強度だけでなく耐久性も損なうおそれがある。その解決策として開発された「自己充填コンクリート」は、自重のみによって鉄筋を有する型枠の隅々まで流れ込み、締め固めが不要。コンクリートの早期劣化が社会問題となっていた1980年代はじめ、本学の元学長であり、大内先生の恩師でもある岡村甫先生によって提唱され、1988年に完成した。世界に先駆けた日本発のオリジナル技術として、各国で研究され、数々の構造物や建築物に用いられている。

中学生の頃から鉄道が大好きだった大内先生

は、「鉄道構造物をつくりたい」という思いから東京大学工学部土木学科に進学した。ではなぜコンクリートの道に進むことになったのだろうか。きっかけは大学3年生の時、JR東日本で行った企業実習に参加したこと。希望していた鉄道の現場ではなく、水力発電所に派遣されたことが、思いがけない転機となった。

「その現場を経験して土木工事のおもしろさに目覚めてしまって。交通計画がやりたいと思っていたんですが、コンクリートや土を扱うことに興味を持ち始めたんです」

「好きなことは趣味として楽しもう」と心に決め、研究室の配属先選びに悩んでいた。ちょうどその時、岡村先生が「自己充填コンクリート」を完成させたことを耳にし、コンクリート研究室の活気に満ちた雰囲気を感じ取ったという。

「僕は珍しいものや良さそうなものがあつたら、パツと何も考えずに飛びつく性格なんです(笑)。岡村先生の研究自体はもちろんです。岡村先生をはじめ、コンクリート研究室の先生方がみなさんとても魅力的でした。人で選んだようなものかもしれません。まさか一生の仕事になるとは思わなかったですけどね」

博士課程に在籍していた時、本学の設立準備を行う中心メンバーだった岡村先生から声がかかり、開学2年目の1998年、本学に着任した。縁もゆかりもなかった高知に来て19年。岡村先

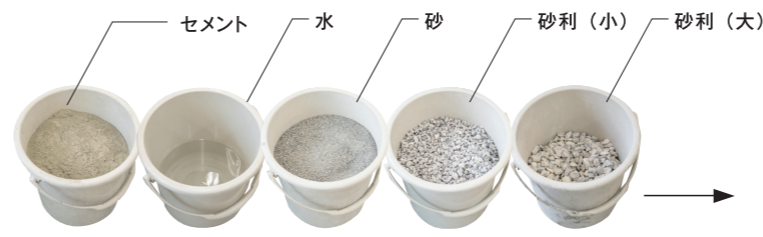
生が開発した「自己充填コンクリート」を広く普及させる責務を一手に担い、その技術開発を進めてきた。

空気泡の微細化で見えてきた 念願だった普及への道筋

“画期的な高性能材料”と評価の高い「自己充填コンクリート」。しかし、その普及は想像以上に困難を極めた。一般化の妨げとなった大きな要因はコスト。「自己充填コンクリート」は、流動性と粘性のバランスをとるために、従来のコンクリートに比べてセメント量が多い。その分、強度は大きくなるが、2倍のコストを要していた。セメント量を減らし、従来のコンクリートの強度を保ちながら、流動性を発揮できる新たな自己充填コンクリートの開発が長年の課題だった。

そして4年前、大内先生はその課題を解決に導く一つの発想を得た。セメント量を減らすと、砂利・砂による摩擦が大きくなり、流動性が損なわれてしまう。そこで、セメントの代わりに細かい空気を増やし、クッションのようにして摩擦を減らすことはできないだろうか……。

2年間は結果が出なかったが、空気の泡を微細化することで材料同士の摩擦低減に成功。「気泡潤滑型自己充填コンクリート」を完成させた。



セメント 水 砂 砂利(小) 砂利(大)
減水剤と空気連行剤

▲コンクリートの材料
コンクリートの構成材料は、セメント、水、砂、砂利、そして空気。強度は水とセメントの比率で変わる。



▲ミキサーで混ぜる
まずはセメントと砂を混ぜる。その後、水、薬剤、砂利を投入し、しっかり混ぜ合わせる。



◀自己充填コンクリートのスランプロー試験の様子
コンクリートの品質を測る指標の一つ「流動性」をチェックするため、スランプコンと呼ばれる試験用の容器にコンクリートを入れ、引き上げた際に広がったコンクリートの直径を測定。この値が大きいかほど、流動性が高い。

これこそ、強度を従来のコンクリート並みにしてコストを抑えた、経済的な「自己充填コンクリート」だ。2倍だった価格は2割増し程度にまで抑えることができています。

特殊な材料を使うことなく、振動や締め固めなしで複雑な箇所にもコンクリートが充填できることで、施工時間の短縮や設計の自由度向上にもつながる。さらに地震に対して性能通りの強度を発揮させるためにも、このコンクリートは大いに有用だという。

「地震の横揺れに耐えるためには、柱に縦だけでなく横方向にも鉄筋を入れることが必要です。鉄筋が過密な箇所はコンクリートの充填が難しいのですが、このコンクリートなら難なく解決できます」

現在は安定供給に向けて、生コン工場で試作を重ねており、1年後の実用化をめざしている。こうして念願だった普及への道筋が見えてきた。

『絶対この方法はいける』と思ったのが4年前。『こうすればうまくいくはずだ』と言い続けて、学生たちと一緒にやってきて、ようやく目に見える形になりました。自分一人ではなく、いかに学生たちを巻き込んでやるか。それこそが大切だと思っています。大学の研究は社会のためだけでなく、学生のためでもありますから」

大内先生は研究の成果だけでなく、常に学生たちの成長を考えているのだ。

自然の力を生かした コンクリートをめざして

コンクリートは手軽で安価な建設材料である

一方、「自然に還らない」という欠点があり、環境破壊の代名詞のようにも扱われてきた。そこで大内先生は2015年、コンクリートを自然による物質循環サイクルに乗せるという新たな研究をスタートした。きっかけは宿毛市の木質バイオマス発電所から、木を燃やした後に残る木灰の活用方法について相談を受けたことだった。構造部材としての使命を終えたら「土

に還る」コンクリートをめざし、セメントを使わずに固める方法を模索していたところ、木灰に水と石灰を加えるだけで硬化することを見出した。「木灰は現在でも肥料として使われているので土に還ることになります。また石灰は畑の土壌改良剤として土に撒くものなので環境への悪影響はありません。セメントをあえて使わず、こうして土に還るものだけにこだわった結果、運良く硬化しました」



▲コンクリート(大内)研究室の学生たち
学部3年から博士2年まで、学生は総勢14名。実験中は、一人ひとりが全体を見ながら、自らの役割通りにテキパキと動くチームワークのよさが際立っていた。この一体感がコンクリート研究室の持ち味だ。

そして2016年に「地還型コンクリート」のプロトタイプが完成。これが実用化すれば、環境にやさしい次世代のコンクリートとして注目を集めそうだ。

「強度は従来のコンクリートの約10分の1ですが、車が上を走っても壊れないくらいの強度は確保できています。どういところで活用するかも今構想中ですが、そんなことを一から考えるのもおもしろいなと思って、学生たちと一緒にやっています」

大内先生は最近、「研究している姿が楽しそう」と周りからよく言われるという。そんな先生の姿に感化されたのか、研究室の学生たちもみな生き生きと実験に励む姿が印象的だった。「僕にとっては、学生が楽しんでやってくれることが一番です。自分が作ったモットーは、“知識一瞬、習慣一生”。最先端の知識を教えても、時間とともに古くなってすぐに使えなくなりますが、良い習慣を身につければ、それは一生ものになります。そんなことを研究の中でつかんでほしいですね」

やるなら目の前のことだけでなく、“無理なく長続きすること”を。それは、地球の上に構造物をつくる土木の本質にも通ずる。これからは地球や自然と向き合いながら、安全で信頼性の高い技術開発を、学生たちとともに続けていく。

コンクリートに含まれる 空気泡の大きさや量を測る機械▶

コンクリート中に含まれる空気泡の大きさや量を計測する機械。「気泡潤滑型自己充填コンクリート」の研究に重要な役割を果たしている。



システム工学群

大内 雅博 教授

NO.69 OUCHI MASAHIRO

PROFILE

1968年茨城県石岡市生まれ。東京大学工学部土木学科卒業。同大学院博士課程修了。博士(工学)。東京電力、東京大学助手を経て、1998年高知工科大学に着任。専門は土木工学およびコンクリート工学。21世紀の社会基盤のあり方を探るため、世界各国をめぐり、数々の書籍も出版。主な著書に「世界インフラ紀行」(セメント新聞社、2002年)、「時刻表に見るスイスの鉄道」(交通新聞社、2009年)など。ライフワークは鉄道。

大内先生が海外を 回って綴った著書▶



PROFESSOR'S PERSONALITY

生粋の鉄道好きで知られる大内先生。「乗り鉄」として、ヨーロッパ、アメリカ、アジアと世界40カ国以上の鉄道に乗車してきた。その中でもお気に入りの国はスイス。「車窓からの風景が美しいのはもちろん、ダイヤの組み方や接続が非常に巧みで、乗っていて高揚感を感じる」という。好きが高じて、スイスの鉄道に関する著書も出版。さらには、これまで培った知見を生かし、鉄道関連仕事を主とした建設会社の取締役も務めるなど、もはや趣味の範囲を飛び越えている。

M. Ouchi



KUT quarterly NEWS

Winter

年4回にわたって、学生たちが取り組んでいる様々な活動や、先生方の研究成果などをご報告!

10月17日、鳥山 貴生くんが記念すべき第1号として、12月12日、合田 久美子さんが第2号として、KUT Youth Ambassadorに任命され、任命式が執り行われました。

“KUTユースアンバサダー”が誕生しました。工科大の魅力が海外へ伝える大使

KUT Youth Ambassador とは

本学ではグローバル教育の一環として「ジョン万次郎プログラム」を提供し、①指定された正課授業の単位取得、②国際交流プログラムへの参加、③TOEICスコアに応じてポイントが積算され、基準をクリアした学生には修了証が発行されていますが、その中でも特に高度な英語力を身につけ、豊富な国際経験をもつ学生に対し与えられる称号です。任命後はまさに本学の「大使」として、海外に本学の魅力を伝えていく役割を期待しています。



平成25年度のタイ・シンガポール研修にて2列目右 鳥山くん 1列目右 合田さん

今回の任命は大学の国際交流プログラムの充実のおかげであり、この様な立派な認定書を拝受し、身が引き締まります。

私は、高校での教科として英語を学んでいただけで、海外へ行ったこともなく、入学当時は当然しゃべれませんでした。1年生の時に外国籍の学生や研究者と交流するKUTランチアワーへ参加して、しゃべることが全くできない悔しさと、英語でコミュニケーションしている先輩の姿を見て、私もあなりたいと思いました。このときに知り合った研究者や留学生に積極的に話しかけ、研究室を訪ねたりもしました。タイ・シンガポール研修に参加し、文化などの違いを身をもって体験したことは衝撃で、海外への興味がわきました。その後も泰日工業大学(タイ)のサマープログラムへ参加、協定校であるタマサート大学への科目履修留学(6ヶ月)では、特にリスニング力が伸びたと感じます。安徽大学(中国)サマーキャンプにも参加し勉強を重ね、今ではTOEICスコアが800点を超えました。来春にはタイに事業所を持つ企業への就職も決まりました。タイ語も少しずつ勉強して日常会話くらいは話せるようになっていきます。家族も、私の変わりように驚きながらも応援してくれています。高知工科大学に来て本当に良かったです。一歩踏み出すことで、こんなに未来は変わるという体験やプログラムの良さなどを、今後は後輩に伝えていきたいです。



このたび、KUT Youth Ambassador 第1号に任命していただきまして誠にありがとうございます。今回任命いただけたのは、本学の国際教育支援制度が充実しており、タイ・シンガポールや米国への短期研修、西シドニー大学への留学等で、勉強させていただいたおかげです。私は、マネジメント学部の「国際マネジメントプログラム」に魅了され入学しました。1年生の時から、タイ・シンガポール研修等に積極的に参加し、3年生の時、念願の西シドニー大学への長期留学が実現しました。留学中、グローバルな環境の中で、マネジメント学を学ぶことができたことは貴重な体験でした。1人で留学したこと、なるべく現地の人との交流を重視したことで、実践的な語学力が身につく、問題解決力や環境適応力も同時に養成されました。おかげさまで、現在、外資系企業に就職が内定しています。マネジメント学部で専門的知識を学んできたからこそ、英語でのディスカッションでも様々な視点で提案でき、成長戦略を、英語で堂々とプレゼンすることもできました。改めて私の進路に間違いはなかったと実感しました。後輩へのアドバイスとしては、とにかく基本は英語を勉強することですが、本学には経済的に優遇された国際プログラムが多いので、それらをぜひ活用し、キャリアアップしていただきたいです。今後はKUT Youth Ambassadorとして、海外の大学の来訪時等に英語で大学を紹介する等、少しでもお役にたてたいと思っています。

KUT Youth Ambassador
第1号

鳥山 貴生 くん
TORIYAMA Takao
マネジメント学部4年

KUT Youth Ambassador
第2号

合田 久美子 さん
GODA Kumiko
マネジメント学部4年

ナノテク研シンポジウム 2016 を開催

11月12日、総合研究所 ナノテクノロジー研究センター主催の「ナノテク研シンポジウム2016」を永国寺キャンパスにて開催しました。

本シンポジウムは、学内外のナノ材料研究者の交流のきっかけづくり、互いの研究分野を知ることで、今後の研究協力の可能性を見出し、研究をさらに活性化することを目的として、毎年開催しています。

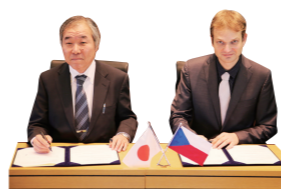
第6回目となる今回は、特別講演として 中山 喜萬氏(大阪大学名誉教授、四国職業能力開発大学校 校長)による「ナノカーボンの微小スケールプロセス」、江 南氏(中国科学院寧波材料研究所 研究員)による「Efforts on CVD diamond and Graphene materials performed at NIMTE」、名村 今日子氏(京



チェコ共和国フラテツ・クラロヴェ大学と 学術協力・学生交換協定を締結

11月4日、本学 環境理工学群(前田 敏彦学群長)と、チェコ共和国の名門校フラテツ・クラロヴェ大学(カミル・クーチャ学長)が、学術協力・学生交換で合意しその調印式が行われました。同大にとって、本学は日本初の提携大学となります。

調印式には、同大学長代理のカレル・コウハ副学長(国際交流担当)と、ヤン・クシシ副学長(戦略・発展担当)、本学から前田学群長、同学群の全 卓樹教授らが出席しました。前田学群長とコウハ副学長が学術交流・学生交換協定書に調印しました。本学にとっては43番目の海外協定大学となります。2005年からフラテツ・クラロヴェ



ドイツのシュトゥットガルト大学と 学術協力・学生交換協定を締結

12月5日、総合研究所(木村 良総合研究所長)とドイツの名門シュトゥットガルト大学の広域マイクロエレクトロニクス研究所(ノバート・フルハフ所長)が、学術協力・学生交換で合意し、その調印式が香美キャンパスで行われました。本学にとって44番目の海外協定先となります。

調印式には、フルハフ所長と木村所長、古田 守教授(環境理工学群)、李 朝暘教授(システム工学群)らが出席しました。フルハフ所長は「高知工科大学には、7年前から何度も研究のために訪問し、両大学の学生たちが研



都大学 大学院工学研究科助教)による「動的斜め蒸着法を用いた金ナノ粒子薄膜の作製と光・熱流体現象制御への応用」の3件が行われ、好評を博しました。

講演後、学内外の学生による口頭発表3件、ポスター発表52件があり、活発な質疑応答が行われました。審査の結果、以下の5名の学生が表彰されました。

- <ポスター賞受賞者>
- Vladislav Gamaleev さん (本学 博士後期課程2年 基盤工学コース)
 - 高瀬 和貴さん (本学 修士課程2年 物質生命システム工学コース)
 - 米花 有希さん (本学 システム工学群4年)
 - 内田 昌志さん (京都大学 工学研究科修士課程2年)
 - 神野 莉衣奈さん (京都大学 工学研究科修士課程2年)

大学のチェコ人学生を博士後期課程に受け入れ、その後、6人の日本人学生を研究のため、同大に派遣するなど、交流が続いていました。

コウハ副学長は「チェコのフラテツ・クラロヴェ市は『共和国のサロン』と言われるように、世界中から学生が集まる歴史的な街。高い研究レベルを誇る高知工科大学から、さらに多くの学生に留学してほしい」と、今後の交流に意欲を示しました。前田学群長も「この提携を弾みに物質科学や基礎物理学などの分野で相互協力し、本学のグローバル化を加速させたい」と抱負を述べました。

※フラテツ・クラロヴェ大学は1959年創立の国立大学で、学生数は約7,000人。理学部、教育学部、人文学部、情報科学・マネジメント学部、社会福祉学部の5学部があります。



究交流してきた実績もある。今回の調印を機会に、ますます協力関係を発展させたい」と述べ、木村所長も「本学から多くの学生や研究者が、貴学を訪れる機会をつくってほしい」と応え、お互いの抱負を確認しました。本学は平成23年3月にヨーロッパ研修の一環で、学生10人、教職員6人が同大学を訪問したほか、2人が研究留学しており、シュトゥットガルト大学からは、博士後期課程の学生1人と、インターンシップ生2人を受け入れています。

海外インターンシップ プログラム報告会を開催

11月9日、平成28年度 海外インターンシッププログラム報告会を開催しました。

今年度は、15名の学生が、タイ、ベトナム、インド、シンガポール、ニュージーランドの5ヶ国9企業・団体で約1ヶ月間、グローバルビジネスを体験してきました。

本学では、海外での就労体験を通して、外国語でのコミュニケーション能力と異文化適応力を養うと共に、多様性を受け入れる寛容さと自国の文化や歴史に対する理解の重要性を認識することによって、グローバル社会での活躍を志す人材を育成することを目的として4年前より海外インターンシップを実施しています。学生達は、訪れる国の言語や文化、実習先企業とその状況調査などの事前学習を経て、ものづくりやシステム開発、酪農関係など様々な内容の実習に臨みま

した。報告会では、インターンシップ参加者が実習内容やその国、業種ならではの話題について、プレゼンテーションを行い、「海外インターンシップへ参加したいと思ってその実現のために今まで頑張ってきた。今の学びが役に立つことが分かり、自信につながった。」「向上心の高さや積極的な姿勢を目の当たりにした。何事も意欲的に学び、国際交流にも取り組みたい。」といった、実体験を通じての意識変化について発表。多くの参加者が、将来、海外で働きたいと述べ、一層勉学に励みたいと語りました。

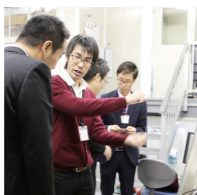


韓国の慶南科学技術大学校 代表団が来学

11月8日、本学の協定校である韓国の慶南科学技術大学校からキム・ビョンチョル国際交流語学教育センター長とパク・サンヒョク企画部長が来学されました。両氏からは、八田 章光国際交流センター長、先川 信一郎国際交流センター特任教授らに対し、同校で展開されている国際プログラムや今後の同大学の発展について説明がなされ、本学との今後の学生交流について前向きな意見交換が行われました。



大学説明会・情報交換会を開催



11月2日、企業の採用担当者をお招きし「平成28年度 大学説明会・情報交換会」を、香美キャンパスにおいて開催しました。本イベントは、本学の就職支援の取り組みや教育環境等を紹介するとともに、本学に対する意見や要望をお聞かせいただく場として開催しており、今年度は約350社470名様にご参加いただきました。講堂では本学への理解を深めていただくべく、磯部 雅彦学長、横山 和俊就職センター長より、本学の現況ならびに就職支援への取り組みについて説明しました。また、参加いただいた企業の方々と本学教職員の間で、求める人材像や本学の就職支援体制について活発な意見交換がなされたほか、研究室では学生が日々取り組む研究内容等について、自ら説明を行いました。

受賞 NEWS

● 重山教授 土木学会デザイン賞 2016 最優秀賞を受賞



公益社団法人土木学会 景観・デザイン委員会が主催する土木学会デザイン賞2016において、システム工学群 重山 陽一郎教授がデザインした「天神川水門」が最優秀賞を受賞しました。

同賞は、道路・街並み・公園・河川等の公共空間・公共施設や、橋梁・堤防等の構造物等として実現されているものが対象で、土木構造物や公共的な空間に、計画や設計技術など創意工夫によって周辺環境や地域と一体となった景観の創造や保全を実現した作品、それらの実現に貢献した関係者や関係組織が対象です。

平成28年度は「最優秀賞」4作品、「優秀賞」6作品、「奨励賞」4作品が受賞作として選ばれました。授賞式は東京新宿区の土木学会講堂にて1月29日に行なわれます。当日は、受賞者によるプレゼンテーションも予定されています。

● 渡辺准教授 World Architecture Community 23cycleにてWinnersのひとりに選ばれました



システム工学群 渡辺 菊真准教授がデザインし、セルビルドで建設した「金峯神社の暹拝殿」が、[World Architecture Community 23Cycle]においてWinnersに選ばれました。

本作品は、高知県香美市の中山間地域に作成された神社の仮拝殿です。渡辺准教授とその研究室の学生で建設チームをつくり、車道も電気も通っていない場所に、建築部材を徹底して規格化するなどの工夫をこらし、形状は神聖な山をかたどるだけでなく、それにつながるトンネルが象徴されています。

● 野本講師 応用物理学会「結晶工学分科会発表奨励賞」受賞



11月7日、応用物理学会 結晶工学分科会主催の「第5回結晶工学未来塾」が、東京農工大学で開催され、総合研究所マテリアルデザインセンター 野本 淳一講師が、「結晶工学分科会発表奨励賞」を受賞しました。

本賞は、結晶工学の発展に貢献する優秀な若手会員の発表に対して授与されるもので、野本講師が研究する極薄膜（10nm以下）での構造解析と、その知見に基づいた「高キャリア輸送」という従来研究では未開発な高機能を創出する酸化亜鉛透明導電膜実現に対する研究成果が高く評価されました。

起業マネジメントコースのオープンキャンパスを開催

11月23日、来春新たにスタートする社会人対象の大学院起業マネジメントコースのオープンキャンパスを、永国寺キャンパスにて開催しました。

高知県内の経営者や企業・自治体等にお勤めの方を中心に、多くの社会人の皆様にご来場いただきました。那須 清吾コース長による教育プログラムの説明を皮切りに、永島 正康教授による体験講義、起業家コース修了生2名の体験談、入試制度の説明等が行われ、参加された皆様は真剣な眼差しで、時折メモを取りながら説明に耳を傾けていました。参加者からは、教育プログラムや研究計画に関する質問をはじめ、たくさんの意見や相談もいただき、社会人の学びに対する意欲や関心の高さを感ずることができました。



おめでとうございます！

● SCIS&ISIS2016にて、「IEEE CIS Japan Chapter Young Researcher Award」受賞



8月25～28日、北海道の北海学園大学にて開催された「SCIS & ISIS2016」において、大学院博士後期課程 基盤工学コース2年の四宮 友貴さんが「IEEE CIS Japan Chapter Young Researcher Award」を受賞しました。

電子情報通信学会情報セキュリティ研究専門委員会（ISEC 研）が主催するアジアで開催されるソフトコンピューティングと知的システムに関する国際会議で、四宮さんは「An Analysis of Dependency of Prior Probability for Codebook-Based Image Representation」というタイトルで発表し、優れた発表者として選ばれました。

● 化学工学会秋季大会の超臨界流体部門シンポジウムで、学生賞受賞



9月6日～8日、徳島大学で開催された「化学工学会 第48回秋季大会」の超臨界流体部門シンポジウムにおいて、大学院修士課程 物質生命システム工学コース1年の隈部 佳孝さんが学生賞を受賞しました。

世界的にも高い評価を受ける我が国の超臨界流体研究の分野において「不飽和脂肪酸を用いた極小酸化チタンナノロッドの高温高压合成」をテーマにプレゼンを行ない、優秀な講演を行った学生として選ばれました。

● ACCM10でベストプレゼンテーションアワードを受賞



10月16日～19日、韓国・釜山で開催された「10th Asian-Australasian Conference on Composite Materials (ACCM10)」において、大学院修士課程 知能機械システム工学コース2年 出口 洸二さんがベストプレゼンテーションアワードを受賞しました。ACCMは複合材料の国際会議で、世界の研究者や技術者が最先端の研究成果発表や情報交換などがおこなわれます。出口さんは、「Development of Real-time Cure Monitoring System of FRP Prepregs」というタイトルで口答発表し、優れたプレゼンテーションに選ばれました。

● 「第2回 たまりコンペ」で最優秀賞を受賞



11月23日、国際デザイン・ビューティー・カレッジ主催の「第2回 たまりコンペ」の表彰式が高知市で挙行政され、本学大学院修士課程 社会システム工学コース1年 松林 幸佑さんが、最優秀賞を受賞しました。本コンペは、「交流の場としての“たまり”」をテーマに空間をデザインする競技設計で、大学・専門学生の部70点以上の応募の中から、松林さんの作品「子供達のたまり場」が選ばれました。香美市土佐山田町の学童保育について、現状から公園をイメージした子供達みずからが来たいような楽しい場所にする事をテーマにしました。

脳コミュニケーション研究センターの研究成果が国際学術誌「eLIFE誌」に掲載されました

8月23日、脳コミュニケーション研究センターの木村 岳裕助教と、東京大学 野崎 大地教授らの研究グループは、頭皮から脳に微弱な電流刺激を加えること（経頭蓋直流電流刺激；tDCS）で、ヒトの運動スキル修得に関わる「運動記憶」を操作することに成功しました。



本成果が世界的に評価され、国際学術誌「eLIFE 誌」に掲載されました。

左向き・右向きに外力の加わる2種類のレバー操作の運動記憶とtDCSの陽極・陰極電流を条件付けして学習することにより、電流の極性に依り、いずれか一方の運動の記憶を甦らせることに、世界で初めて成功しました。将来的には、アスリートの効率的なトレーニング手法や障がい者のリハビリテーション手法などの開発に応用できると考えられます。

※「eLIFE 誌」は、Nature や Science などの商用誌とは一線を画して、ハードヒューズ医療研、英ウェルカム財団、マックスプランク協会らが助成しているオンラインジャーナルで、2016年度IF=8.303と高く、アカデミアでは近年注目の国際学術誌です。

高知県高等学校数学コンクール表彰式を執り行いました

11月13日、地域教育支援センター主催「平成28年度 高知県高等学校数学コンクール」の表彰式を永国寺キャンパスで行い、磯部 雅彦学長より、高校生に各賞が授与されました。

本コンクールは、高知県内の高等学校に在籍する生徒で、数学に興味・関心を持つ方を対象に、数学的な見方や考え方、および思考力を培うことを目的として本学が実施しているもので、今年で4回目を迎えます。

問題作成は本学と県内高等学校の先生方によって、発想力があればスムーズに解ける問題など、毎年趣向を凝



らした問題が作成されており、今年度は個人からの応募のみが集まりました。

当日は、各問題の出題者から、解法についての解説が行われ、普段高校生が触れるものとは異なる問題へのアプローチなどについても説明がありました。

- 最優秀賞 三澤 颯太さん（高知追手前高等学校3年）
- 優秀賞 眞鍋 佑心さん（土佐高等学校1年）
- 市川 淳さん（高知小津高等学校2年）
- 奨励賞 高橋 和希さん（土佐高等学校2年）

Space.Lab部 ハイブリッドロケットエンジンの燃焼実験成功

11月12日、Space.Lab部 KUT Rocket Project (KRP) が独自に製作したハイブリッドロケットエンジンの燃焼実験を行いました。

今回は本学の学生が、既存の一部企業への依存を解消すべく「エンジン地上支援機材（GSE）」や「燃焼架台」など全て自作し、それらを用いたエンジンの燃焼実験に挑戦しました。途中複数のトラブルに見舞われたものの無事エンジンを燃焼させることができ、実験は成功を収めることができました。当日は、ロケットエンジンの専門である千葉工業大学の和田 豊准教授におも越しいいただき、豊富な経験を生かした様々なアドバイスもいただきました。今後は、この実験で検証を行った自作GSEを用いて、実際にロケットを打ち上げていく予定です。

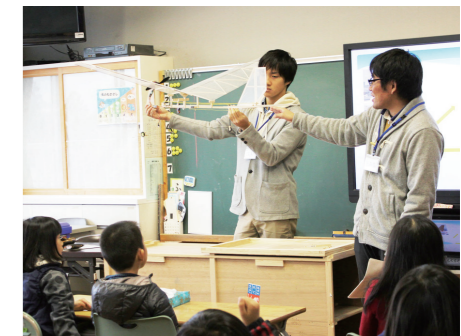


航空研究会が小学校で一日授業を行いました

11月27日、香美市立楠目小学校の3年生を対象に、航空研究会の学生6名が出前授業を行いました。

この授業は毎年11月に、楠目小学校が外部講師を招き普段学校で学べないことを学習し、見聞を広めることを目的として行っているものです。

授業の前半では、飛行機の歴史や飛ぶ仕組みについてクイズを交えて説明を行いました。同研究会が今夏に優勝した「第12回全日本飛行ロボットコンテスト」の飛行映像には、参加した児童も保護者も真剣に見入っていました。授業後半では、同研究会が準備した画用紙等を用い、紙飛行機を制作しました。パーツの方向を間違っていたり付くなど、子供たちは苦戦していましたが、参加学生の助けもあり、全員完成させる事ができました。実際に飛ばしてみると、なかなかうまく飛ばない機体もありましたが、飛ばすコツを教えてもらうことにより、遠くへ飛び喜んでいる子ども達の姿が印象的でした。短い時間でしたが、子供たちは学生に目を輝かせ、学生にとっても自分たちの活動を次世代に伝える良い機会となりました。



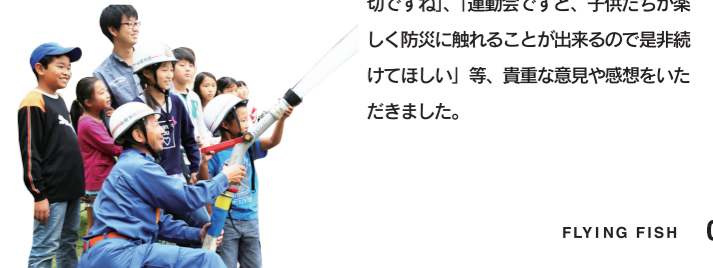
防災イベント「守ろう命・学ぼう防災 in 工科大」を開催

10月23日、学生防災ボランティア団体「KPAD」が主催する防災イベント「守ろう命・学ぼう防災 in 工科大」を香美キャンパスで開催しました。

本イベントは、大規模地震の発生を想定して「いのちを守る・いのちをつなぐ・防災について学ぶ」をテーマに、防災をスポーツやゲームにマッチングさせ、楽しく防災を学ぶことを目的としています。

災害時の対応を身につける「防災運動会」や炊き出し訓練、防災スタンプラリーなどが行われ、地元の小中高生、地域の方々等、約40名が参加しました。防災運動会では、防災ワードが並ぶビンゴカードで防災の知識、用語等を学ぶことが出来る「防災ビンゴ」、カーテンと2本の突っ張り棒で作った即席担架で備蓄水のペットボトルを運ぶ「担架リレー」など計5種目が行われ、参加者は楽しみながら防災への理解を深めていました。

また、放水体験では香美市消防団・山田分団員でもある同団体代表の上村くん、同運動会実行委員長の以西くんも加わった消防団による消火訓練が披露されました。参加された方々から「身近なもので担架が作れることに驚いた。普段からの防災への意識が大切ですね」「運動会ですと、子供たちも楽しく防災に触れることが出来るので是非続けてほしい」等、貴重な意見や感想をいただきました。



西條教授が 理研創立百周年記念シンポジウムに登壇

12月10日、東京・品川にて、理化学研究所創立百周年・理研脳科学総合研究センター（BSI）創立20周年の記念シンポジウム「脳科学と社会の未来」が開催され、フューチャー・デザイン研究センターの西條 辰義教授が講演を行いました。

西條教授は「地球の将来のための脳科学」と題したテーマで、ヒトの持つ3つの特質「相対性」と「社会性」に加えて「近視性」の説明を行い、今後起こりうる「現在の自己に重きを置くバイアスを克服する自己制御メカニズム」の不足による、地球の将来に関する危険性について指摘しました。また「7世代先の子孫」のことを考える上で、フューチャーデザインの重要性、それに伴う社会の仕組みの可能性について、時にはユーモアを交え

た講話が行われました。講演後に行われたパネルディスカッションでは、過去にノーベル賞を受賞されたBSIの利根川 進センター長、京都大学iPS細胞研究所長の山中 伸弥教授とともに、脳研究を今後どのような方向へ進めるべきか、どういったビジョンを持ち続けるべきか、さまざまな角度から議論がなされました。



「KUT+illumination'16」 開催しました

地元香美市の冬の風物詩として親しまれる『KUT+illumination'16』が、今年も12月1日からはじまり、香美キャンパスの景観の美しさを最大限に活かした、約3万球のLEDが夜空を煌びやかに彩りました。本イベントは地域の皆さまとの交流を図ることを目的とし、学生団体が主体となり今年で14回目の開催となっています。

「クリスマスイベント」も12月17日、18日の2日間にわたって開催され、多くの方々にご来場頂きました。学生団体によるパフォーマンスの他、光の化学教室「illumi.Lab」、星空を鑑賞するプラネタリウムなどの企画が用意されました。illumi.Labは科学の面白さ・美しさに触れてもらう企画で、光る食べ物やスライムの展示、炎色反応や、蛍の発光の再現実験の実演も行なわれ、参加した方は、光るスライムを手にとったり、熱心に質問をしている姿も見受けられました。寒空の中、ダンスなどのパフォーマンスを披露や、音楽団体によるクリスマスモードを演出する歌や音楽の演奏を楽しんで頂きました。



ノーベル賞受賞者 中村教授の講演会を開催します

1月23日、開学20周年記念事業として、青色LEDに関する研究で2014年にノーベル賞を受賞された中村 修二教授（カリフォルニア大学サンタバーバラ校）をお招きし、青色LEDの開発秘話や光に関する技術の将来についてご講話をいただきます。（応募の受付は終了いたしました）

中村 修二教授は1993年に、InGaNを発光層とするダブルヘテロ構造高輝度青色LEDを発明し、世界で初めて発光に成功され、さらに1996年には同

第七回みとよロードレース 宝山湖大会にて、サイクリング部が入賞

10月30日、「第七回みとよロードレース 宝山湖大会（主催：みとよサイクルロード実行委員会）」が香川用水調整池宝山湖および周辺道路特設コースで行われ、サイクリング部の山本 健太郎くん（システム工学群2年）が、U23のカテゴリーで第3位に入賞しました。



ソフトボール部が全国大会に出場、 ベスト16に進出しました

8月26日～29日、鹿児島県南九州市の知覧平和公園で行われた「文部科学大臣杯 第51回 全日本大学男子ソフトボール選手権大会」（主催：日本ソフトボール協会、全日本大学ソフトボール連盟）に、ソフトボール部が出場しました。四国予選を制した同部は、8月26日の初戦：京都産業大学との接戦を制しましたが、2回戦で常葉大学と投手戦を繰り広げた結果、惜し



県内アマ将棋 No.1 決定戦 南海王将戦を初防衛

11月19日、高知県内アマチュア将棋界の頂点を決める「第47期 南海王将戦（主催：高知新聞社）」の第2局が、高知新聞放送会館で行われ、現南海王将の山本 健太くん（情報学群2年）が挑戦者を退け、見事初防衛を果たしました。将棋同好会所属で将棋四段の腕前を持つ山本くんは、先勝して迎えた第2局でも、挑戦者の終盤の猛攻を凌ぎきり、162手で勝利を収めました。



構造を用いて、世界で初めて青色半導体レーザーの発振にも成功されました。製品化されたLEDは各種ディスプレイ、屋内外や車載用の照明等に、青色半導体レーザーはブルーレイDVDに代表される光ディスクの高密度光記録用光源として、現在世界的に利用されています。



本大会は、実力別7つのカテゴリー分けによる個人ロードレースで、その内チャンピオン（42.0km）クラスは中学生以上でレース経験の豊富な日本自転車競技連盟登録者20名と、第51回全国地域別自転車道路競争大会との併催のため合計60名で競走となり、山本くんは23歳以下のカテゴリーで第3位を獲得しました。



くも敗戦。ベスト16という結果となりました。

【試合結果】

二回戦 VS 京都産業大学 (7-6)
三回戦 VS 常葉大学 (0-2)
同部主将の小池 紳之助くん（経済・マネジメント学群2年）は「更に目標を高く持ち、メダルを獲得すべく、ベスト4入りを目指します」と、悔しさを堪えながら語ってくれました。

『Flying Fish Festival 2016』を開催しました

第20回という大きな節目を迎える、今年のテーマは「JUMP」。これまで多くの先輩方が作り上げてきた大学祭を飛び越えていこうという思いと、これから後輩達が作り上げる大学祭がどんどん飛躍していけるようにと、二つの願いが込められています。

初日は天候に恵まれ、雲一つ無い秋晴れの下、キャンパスグリーンでは活気ある模擬店、特設ステージでは屋台チームによる対抗戦やよさこい演舞が華やかに開催され、レイクサイドステージや講堂では、ダンス、吹奏楽コンサート、ライブのパフォーマンス等、延べ約30を超える企画が開催されました。

二日目は、曇り空から小雨となり、急ぎよテントの中での演奏や、場所を変更してのパフォーマンスとなりましたが、幸い、お笑いライブや打ち上げ花火の際には雨粒が落ちず、多くの方々にご覧いただくことができ、大盛況のうちにフィナーレを迎えることができました。



開学20周年 ロゴ・マーク が決定しました



高知をイメージさせる、太平洋と山々をスクールカラー2色で表しています。キャッチコピーについては、開学以来20年を経てさまざまな環境が変化をしても、志高く開学した当時の初心を忘れず20周年の今こそ、高知工科大学の志をより高く内外に発信するという姿勢をメッセージにしました。



Vol.19
Shinomori
Keizo

先生自身が日々感じていることを、ちょっとイイスギなくらい語ってもらいました！

今回言い過ぎる人
篠森敬三 センセイ（情報学群）

この企画が最後かも、とのことで登場です。趣旨に合わせ言い過ぎることにします。私は開学時からもう20年も教えています。学生の皆さんはあまりご存じないと思いますが、開学時は私学で、学費も年124万円でした。その頃は、学費の元を取るため、うかうかしてられないという学生の緊張感を感じていました。7年前に公立大学になってから、入試難易度がぐんと上がり、倍率が高くなる中で、全体的に学生の基礎学力が上がったと思います。

ただ残念ですが、公立大学になってから、物事に淡白な学生が増えた印象があります。極端には、本学にたどり着いて燃え尽きてしまった様な学生もいます。旧帝大系でもないですし、卒業するのも大変ですから、最初から真っ白な灰では困ります。一方、第一志望に落ちたのか、敗残感が漂う人もおります。一般的な学生の場合には、現前に見える枠（フレーム）の中でのみ、自分の立ち位置を決めてしまっている印象が見受けられます。

現在とは、過去の選択や蓄積に、運も加味された結果ですから、ずっとこのままである必然性はなく、むしろこれからの活動の出発点と捉えるべきです。その意味で、何かに意欲的に取り組み、大学や大学院在学中に色々なことが出来るのになあ、と思ってしまう。単に、授業や研究室、サークルや部活に参加するだけだと、用意された枠組みでの活動になってしまいます。何か1つでも積極的に取り組み、自分自身の力で枠を拡げ、新しい世界を切り広げられるのではないのでしょうか。

そうは言っても、実際には難しいと思います。今までは選択するばかりで、ゼロから新しく作る機会はあまりなかったかもしれません。何かを成すには根気よく続けることが必要で、これを行う能力について、最近では研究が進んでいます。必要なことは、まず情熱が持てる何かを見つけ、勇気を持って主導的に取り組むことです。困難に当たっても打たれ強く、最悪の状況でも冷静な判断力を失わないようにして下さい。立ち直る力を発揮し、粘り強く進んでいけば、きっと大きな成果が得られると思いますし、そこで獲得した能力は、今後の人生の中で常に役に立つことだと思います。

情熱と勇気で
日本の世界を
広げよう!!



IISUGI teacher
4代目イイスギジャッジ
高知工科大学 企画広報部 長山

おめでとーございます！

Information おしらせ

開学記念日である11月7日、平成28年度開学記念日式典が執り行われ、学生への各種表彰、教員表彰、名誉教授称号授与が行われました。



学長賞

学業成績最優秀賞 学士課程 2年次生以上の前年度学業成績が優秀な学生に対して与えられます。

	2年次生		3年次生		4年次生	
システム工学群	田頭 侑貴	安岡 龍哉	吉田 伊吹	有賀 寛純	窪添 諒	福本 勇樹
環境理工学群	岡田 啓汰		坂田 真帆		平石 美波	
情報学群	河島 尚輝		別府 若奈		甲原 春花	
マネジメント学部			熊本 健宏		竹本 圭佑	
経済・マネジメント学群	東 駿次郎	松井 一将				

学業成績優秀賞

	2年次生		3年次生		4年次生	
システム工学群	楠瀬 康夫	砂辺 一行	中山 祐輔	大西 臣禎	中田功一郎	森本祐太郎
	程 和毅	中島 達貴	田村 健太	山口 翼	鶴田 太基	田村 裕吾
	浦西 真維	森 健人	粟田 恭兵	高野 礼	水野 貴斗	五百蔵雅幸
	港 晴輝		岡崎 廉		岡田 澄果	
環境理工学群	野口 匠	石山菜々子	廣田 清美	江口 望	越智 響	藤田 晃広
	野村 翔輝	谷口 彩乃	石田 雅裕	岡田 啓	瀧田 賢一朗	近藤 奏
情報学群	小寺 祐生	松根 愛	松本 康平	北代 悠生	福田 和馬	中野 由童
	明石 悠磨	杉村 侑起	川島 成絵	唐橋 良汰	瀬戸 幹章	吉永 昇平
	河野 奈実		福永 昂輝			
マネジメント学部			山田真由実	中司絵里花	藤本 愛理	関川はるか
			坂本 晃緒	山脇 瑠莉	岩崎 菜那	濱崎 羅奈
			吉本 舞		嶋田 大陸	
経済・マネジメント学群	新納 流星	勝木 駿				
	戸梶 大地	工藤 勇大				
	土居 真菜	坂本 穂乃				
	磯部 可鈴					

アスリート特別優秀賞

卓越したスポーツ実績を挙げるとともに、学業成績が優秀な学生に与えられます。

サイクリング部	津村 篤志	システム工学群 4年	女子卓球部	高原 彩	マネジメント学部 3年
男子卓球部	熊本 健宏	マネジメント学部 3年	ソフトボール部	岩間 輝佳	システム工学群 2年
	福田 知治	マネジメント学部 3年	水泳部	瀧田 美紀	経済・マネジメント学群 2年
	田島 知治	経済・マネジメント学群 2年			

アスリート優秀賞

ソフトボール部	青野 巧	マネジメント学部 4年	男子卓球部	成田 湧介	マネジメント学部 4年
	安塔 和博	マネジメント学部 4年	女子卓球部	澤本あずみ	マネジメント学部 4年
ソフトテニス部	後藤真生紀	マネジメント学部 4年		高原 舞	マネジメント学部 3年
	中川 湧介	マネジメント学部 4年	水泳部	川村 優太	システム工学群 2年
	藤村 拓弥	マネジメント学部 3年			

廣井勇賞

熱き向上心とリーダーシップを持ち合わせた者として、同級生と教職員が推挙する3年次生に与えられます。

有賀 寛純	システム工学群 (機械系)	濱渦 真伍	システム工学群 (建築・土木系)	松本 康平	情報学群
榊原 伊織	システム工学群 (電子系)	福田 理紗	環境理工学群	友利 肇伸	マネジメント学部

学長褒賞

- 課外活動において顕著な成績、業績を収めた者、団体に与えられます。
- サイクリング部
 - CyKUT (サイカット)
 - 麻雀研究会

教員表彰

● The Teacher of the Year

全学年対象のwebアンケートによる「今年最も良かったと思われる授業を行った教員」に与えられます。

篠森 敬三	情報学群 教授
楠川 量啓	システム工学群 教授
鈴木 利幸	共通教育教室 教授

● 名誉教授称号授与

本学の教授として多年にわたり勤務し、教育・研究面で優れた功績を残され、退任された方に対して授与されます。

大塚 幸男
榎本 恵一
島村 和典

今できることを とことんやる。 文武両道「ダブル受賞



学長賞 学業成績最優秀賞 & 学長賞 アスリート特別優秀賞 受賞
熊本 健宏 くん
マネジメント学部 3年

学長賞 学業成績最優秀賞とアスリート特別優秀賞の2つを受賞したマネジメント学部3年 熊本 健宏くんに向きました。—— 受賞おめでとうございます。「文武両道」はたやすい事ではないと思いますが、是非秘訣など教えてください。実は1年生の時は、決まっていた学業成績ではありませんでした。表彰の制度については、卓球部の先輩方が多く受賞されていますので知っていました。卓球の大会成績は練習量や一人だけで結果が出せるものではないので、とにかく勉強を頑張ろうと思いました。—— 卓球部の練習も多量中、少しずつコツコツと勉強を続ける方法ですか？ 平日は、毎日18時から21時まで部活をしていてへとへとなります。食事や身の回りのこと、差し迫った課題をすませて寝るのが精一杯です。休日は遠征などもあります。ですから、限られた時間の中で効率化を図ることを考え、とにかく授業時間中に集中してその時に理解するように努めました。ほんやり聞いているとその部分を理解するために、後でもっと時間がかかります。授業中に生じた疑問は先生に質問して解決させておきました。そうすると思いつきも思いつきしやすいのです。

—— そう考えて行動するきっかけはありますか？ 2年生の初めに教員になりたいと思い、教える立場になって考えてみました。自分の授業を受ける態度や姿勢を見直しました。そして自分は平凡な人間だと思うけれど、自分にできることをやれているか、今自分がやれることを一生涯やったことをセールスポイントにしようと考えました。アルバイトもできないので親の経済的負担も軽くしてあげたい。—— 受賞の喜びをお願いします。二つの賞を頂ける事となったのは、研究室の生島先生をはじめ沢山の先生方、卓球をご指導してくださっている濱田先生や同じ部活の仲間達のおかげです、そして両親の支えあってこそだと思います。感謝という言葉では言い表せないほどです。本当にありがとうございました。気を抜かず3年次の学業成績でも受賞できるように、もちろん卓球も頑張っています。



卓球部でおなじくアスリート賞受賞の仲間たち
左から 高原 彩さん・高原 舞さん・熊本 くん
田島 知治くん・福田 知治くん

受賞者 PICKUP PERSON
PICK UP PERSON

インターネット社会の あんしんを守りたい。 積極的な活動に学長褒賞

CyKUTはコンピュータセキュリティ・インターネットセキュリティに関する自分たちの知識・技能を高めるとともに、人々が安全、安心にサイバー空間(インターネット社会)で暮らせるように、インターネットや不正アプリに潜む危険性や正しいネット利用方法について小中学校・高等学校で講演を行うなど、勉強で得た知識を活かして社会貢献活動を行っている団体です。「サイバー防犯ボランティア」の委嘱は3回目、昨年に引き続き高知県警察本部と協力し、インターネット上の違法・有害情報のバトロール活動(サイバーバトロール)、サイバー犯罪の被害防止のための教育活動や広報活動を学校や団体で行っています。



高知県警察本部より委嘱状を受け取る代表の小寺 祐生くん

10月27日の委嘱式には、高知県警察本部の秋澤 淳一生活安全部長より、代表の小寺 祐生くん(情報学群2年)に委嘱状が手渡されました。日頃からCyKUTでは、週に1回ミーティングを開き、活動内容の方向性や簡単な発表(情報分野での自分の気になったことや調べてみたこと)を行なっています。月に一度は勉強会を開き、情報分野における知識の向上をはかっています。それ以外にも啓発活動やそれに用いる開発を行なったりしています。この秋「CyKUT」の代表となった小寺くんは、「これからも勉強会や啓発活動を通じて個々の知識向上はもとより、より多くの人と関わって視野を広げていきたいと思います。所属人数も増え、私個人としては代表となっただけですが、今まで先輩達が行ってきた活動を継続させながら、CyKUT全体としても成長していきたいと思っています。」と今後の抱負を語ってくれました。

学長褒賞 受賞 サイバー防犯ボランティア団体 CyKUT (サイカット)

■主な活動内容
「SNSの危険性・使い方やインターネットの危険性」について 近隣小学校などでの講演
「スマートフォン向け不正アプリの危険性」について 高校などでの講演
「よさこいネットワークセキュリティセミナー」でのボランティア活動
高知県警察本部の委嘱を受けた「サイバー防犯ボランティア」活動 など



左から二番目が代表の小寺祐生くん

がんばっちゅね! 工科大

Machi no KUT Ouen-Dan INTERVIEW

23

今回の
インタビュー

事務局次長 (永国寺キャンパス)

福田 直史 FUKUDA Naofumi



岩城さんは、開学と同時に高知県庁から本学に来られ、5年間事務局職員として勤務。情報図書館、総務、入試の部署で活躍されました。当時の思い出やご苦労をはじめ、県庁に戻られてからの関わり、そして、いつも心の中でエールを送り続けてくださった本学への思いを語っていただきました。

— 開学と同時に工科大に来ることになり、当時はどうのお気持ちでしたか？

4月に初めて工科大に行った時は外構工事も舗装も十分できてない状況で、通勤も遠くなり、正直これは大変なところに来たなと思いましたね。徹夜して学生を迎える体制を整えたことを覚えています。そして、初めての入学式では大学に魂が入ったのを感じました。学生がキャンパスを歩き回る姿を見て、「ああ、これが大学なんだな」と。一気に活気が溢れてきましたね。

— 1年目は情報図書館、2年目は総務、そして4年目に入試課長に就任されました。私はその時初めてご一緒させていただきましたが、当時は振り返っていかがですか？

当時は倍率が下がってきた頃で、もっと工科大の良さを知ってもらわんといかんという時に福田君が新しい職員として入ってきた。一緒に入試の改善策を思い切ったことで、倍率がグッと上がって。

— 一番しんどい時期の入試課長であり、「1回目の危機を救った」と今も職員の間で語り継がれています (笑)。

どうぞ後年にも伝えていただいて (笑)。

— 一緒にやらせていただいた2年間は、しんどい思いもあった反面、おもしろいこともいっぱいあって楽しい時間でした。5年間で印象に残っていることを教えてください。

風通しのいい、楽しい職場づくりに努めたことですね。チームワークを良くしようと、イベントがあったら楽しく飲みまったり、年末には事務局の笑話を集めた10大ニュースを発表したり。中でも一番の思い出は、僕が総務の時に新たな職員を採用せ

高知県 副知事

いわき たかあき
岩城 孝章さん

応援団員

23

高知工科大学の名を どーんと世界に広めてほしい



ないかんということで、非常に厳選した二人を採用しました。そのうちの一人が福田君やったこと。私が大学に残って来た財産は彼かなと。

— こんなこと初めて言われました (笑)。県庁から来られた職員が多いと聞いていたので、最初はおまえてましたが、いざ入ってみると、とてもあたたかい雰囲気でした。学生たちも教職員と仲良くやってましたよね。

学生たちが慕ってくれてかわいかったですね。県庁に帰ってきて産業振興推進部長に就任した時に、直属の部下に工科大出身者がいて、「こんな時代になったのか」と思ったことでした。やはりずっと愛着はあつて、工科大卒と聞いたら「頑張ってくれよ」とひそかに心の中でエールを送っています。

— 岩城さんは学生だけでなく、先生方も仲良くしてね。

そうでした。工科大の先生は県庁のいろんな委員をやっていますが、お会いした時にご挨拶できる先生がまだいることは心強いです。

— 職員、学生、先生と立場を越えて、和気あいあいとしていました。

最後の歓送迎会で送り出されるときに、不覚にも涙したことを覚えちゃう。思い出がいろいろあつたんやろうね。

— それだけ思ってくれちゃったかなと、残る立場としてはすごくうれしかったです。その後、職員のOB会組織の「とびうお会」を立ち上げていただきました。

今でも年に一回集まって、県庁に戻った職員だけでなく現役のみなさんとも交流しています。これは私が退職してもずっと続けていきたいですね。

— 我々も参加させてもらって、とても貴重な交流と情報交換の場になっています。岩城さんのように工科大の礎を築いた諸先輩方が、県庁に戻って大活躍されて、今もいいコミュニケーションを保つことができている。今後もこの関係を継続していかないかんと思っています。

工科大と県のつながりは積み上げてきたものがあるけど、何十年後には希薄になるかもしれん。大学の實力をもっともっとうつけて、高知工科大学の名をどーんと日本中、世界中に広げてもらえたら、自然と県庁の方から追いかけていくことになりますね。

— なるほど、追いかけてもらうようにならないといかんわけですね。

今でも高知県の企業は工科大の先生方にお世話になりゆうし、県内で就職する学生もたくさんおつて、どんどん広がっていきゆうと思います。高知県の企業で活躍する工科大の卒業生がたくさんおるといのは、この上ない喜びです。

— 最後に、高知工科大学にエールをお願いします。

僕は職員OBとして、一貫して高知工科大学の応援者であり、ファンであるというの間違ひありません。今後も末永くいろんな動きに注目していきたいですね。これからも大ファンですよ。

インタビューを終えて

岩城さんと、真面目な場でお話しするのはいつ以来のことやら (笑)。普段から飾らない気さくな方で、どこでお会いしてもすぐ15年前の、上司と部下の関係に。そんな間柄の2人なのですが、今回は初めて聞くお話もたくさんあり、意外なほど(?)の「工科大愛」を感じました。「どーん」と工科大の名を広め、岩城さんに「あの工科大で仕事をしようがぜ」と言わせましたので、みんなお楽しみにしちよってください!